

東海道だけじゃない 戸塚の古道 鎌倉道のおはなし

「鎌倉道」の姿



戸塚には、東海道より古い時代から多くの人々に利用されてきた道があります。1180年頃、源頼朝により鎌倉幕府が開かれると、鎌倉と関東各地の御家人の領地を結び、有事の際には「いざ鎌倉」と鎌倉殿の元へと向かう重要な道路として「鎌倉道」が発達しました。その後、時代の変遷によって、旅人などが鎌倉へ向かう道の中にも、「鎌倉道」と呼ばれるようになったものがあります。今も区内に残る「鎌倉道」のうち、メインの道路であった「上道」「中道」と、東海道から分岐して鎌倉へ向かう支道「吉田道」をご紹介します。東海道とはちょっと違う「昔の道」を感じてみませんか。



関東各地と鎌倉をつなぐ街道は、都(京都)に近い側から「上道」(かみのみち)、「中道」(なかのみち)、「下道」(しものみち)と呼ばれる3本の幹線道路があり、ここから数多くの支道が枝分かれしています。(諸説あり)
区内には、東海道から分岐した支道「吉田道」もあります。

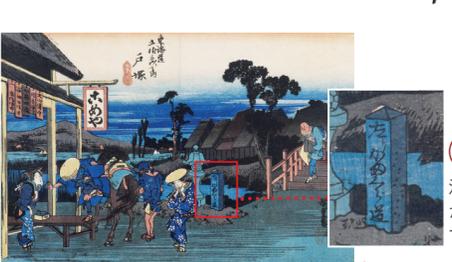


江戸時代、「寺社参詣」が庶民の間で流行しました。浮世絵の右奥に見えるのは「長谷の大仏」と思われます。描かれた人々は、鎌倉に向かっていのでしょうか。
戸塚宿が東海道と鎌倉道の分岐点であることが象徴的に描かれていますね。

◀東海道五十三次 六戸塚(横浜市中央図書館所蔵)



大橋を起点に、栄区の笠間へと続く道で、鎌倉道の一部となっています。江戸時代に描かれた東海道五拾三次の浮世絵にも「左りかまくら道」と書かれた道標をみることができ、東海道から鎌倉へと続く主要な道であったことがわかります。



大橋
江戸時代には東海道から鎌倉への分岐点でした。
浮世絵に描かれた道標が今も残っています。(妙秀寺内)



鎌倉と下野国(今の栃木県)を結びます。鎌倉時代の記録にも記載があり、古くから重要な道であったことがうかがわれます。現在は舞岡公園などがあり緑豊かなルートです。



南谷戸では、昔から地域や旅人の無事を祈ってわらじを奉納する習わしがありました。大正初期から大きなわらじを作り始め、今でも全長3.5mのわらじが3~4年ごとにかけかえられています。

吉田道沿いにある「南谷戸おおわらじ」。多くの旅人が通る道だったんだね。



舞岡に残る庚申塔の碑面には「かまくら道」、「ぐみやうじ道」と記載があり、中道の分岐点であることがわかります。石碑には「前岡村」とも彫られていて、「舞岡」の昔の名前がわかります。



よく見かけるけどこれって何?
庚申塔のおはなし
江戸時代に庶民に流行した民間信仰、庚申信仰に基づく石塔です。人間の体内に住むという「三尸虫」は、60日に一度くる庚申の日の夜、眠った人の体を抜け出て、その人の悪行を天帝に報告し、寿命を縮めるといわれています。これを防ぐため人々が集い、寝ずに過ごす「庚申講」を継続した証として、各地に庚申塔が建てられました。



泉区や藤沢市との境を通る道です。鎌倉と上野国(現在の群馬県)を結びます。尾根や山中を通る道で、平安時代後期には有力武士団に利用されており鎌倉幕府成立前から交通の要衝でした。

上道周辺に伝わる伝説

鬼鹿毛と照手姫の伝説
現在の俣野町「ウイトリツヒの森」近くにあった鬼鹿毛山には、かつて荒馬の鬼鹿毛がいました。室町中期頃、小栗城(茨城県)の城主小栗満重が、足利持氏に攻め落とされ逃げる途中、盗賊に命を狙われ、鬼鹿毛を乗りこなして危機を逃れました。しかし毒を盛られ命を落としかけたところ、彼を哀れんだ照手姫に救われ、奇跡的に命を取り留めました。

影取池と鉄砲宿伝説
昔、遊行寺近くに住む森家は「おはん」と名付けた大蛇を飼っていました。しかし、その大蛇は食欲旺盛で、森家は蛇を池に捨て、しかたなく大蛇は旅人の影を食べて生き延びていました。困った村人たちは、大蛇を退治するために鉄砲撃ちに頼みました。彼らは「おはん」と呼び、大蛇が姿を現したところを撃ちました。こうして池のあった場所は「影取池」、鉄砲を撃った所は「鉄砲宿」と呼ばれるようになりました。

戸塚の古道 鎌倉道の歴史を歩く散策マップ

区内にある、今も残る鎌倉道や周辺の歴史あるスポット、鎌倉道ゆかりの石碑などを紹介。



配布場所 ●区役所/3階情報コーナー、9階93番窓口 ●東戸塚駅行政サービスコーナー